コンタミはいつの時代も分かりにくい

西村　直也

芝浦工業大学建築学部

このほど室内環境学会から「薫風」の執筆依頼の打診を頂き，軽い気持ちで承諾した。内容はかなり自由との事なので承諾したは良いが，さて何を書いたらよいのやら，と迷った挙句，己がなぜ室内環境に接する様になったか，いたって個人的な事を書く事にした。

今後この分野の研究者を目指す諸氏に伝えたい事を自分の言葉で伝える。従ってここから先は，学術的には殆ど意味の無い文章である。

筆者が室内環境の世界に入ったのは全くの偶然である。東京工業大学工学部建築学科に学生として所属していた私は，卒業研究の研究室として藤井修二先生（東京工業大学名誉教授）のもとに配属された。

今だから白状するが，建築の世界ではまず「意匠（デザイン）設計」が一番人気で，次に「構造設計」，そしてその次が「環境設計」の分野である。建築学科に入学してくる学生は，大概の場合，最初は「意匠設計」を希望する。筆者もそうであった。しかし己の美的センスの無さに苦しみ，誰かに引導を渡して欲しいと思っていたところであった。そんな時に卒業研究の研究室配属が始まった。結果，環境系の研究室に配属される事が決まった。そこで考え方を大きく変更した。環境系の分野に入った以上，この分野で成功してやろう，などと考え始めた。

その様な大それた事を考えていたある日，藤井先生から「クリーンルームの空気質の“評価”について研究してみないか？」とのサジェストを頂いた。まだ建築分野でもクリーンルームの研究が盛んに行われていた時代で，建設業としてのクリーンルームの研究の比重は今と較べものにならない程重要なテーマであった頃である。米国でFed..Std. 209Eが発足し，ほぼ同時に日本でもJIS 9920が出来た頃である。懐かしい時代ですね。

この2つの規格は，ともに清浄度が高い空間のSPMの評価の際，いくら長時間計測を行っても殆どSPMが検出されないために，その状態で如何に清浄度の品質保証を行うか，というものであり，後にISOにも取り入れられる逐次検定法という考え方をベースにしたものである。この2つの規格に対して，比較・検討を行ったが，それなりに評価されたと自負している。その後，ゼネコンに就職した。技術研究所では無く設計部およびいわゆる「現場」であった。製薬工場であり，バイオロジカルクリーンルームの現場であった。バイオロジカルクリーンルームの建築は恐ろしく複雑かつ繊細なものだと身をもって知った。しかし何か物足りない。自分が居るべき場所では無いと感じる様になり，会社を辞め，また大学院に戻る事とした。筆者はまた空気環境の研究を選んだ。何故か？ただ単に，空気という得体の知れない，文字通り空気の様な存在を相手に研究する事に，何かしら底知れぬ可能性と興味を持ったからである。

ここからが本題である。

昨年度から突如発生したCOVID-19の問題である。三密の内，「密閉」は明らかに室内環境の問題である。しかし同時に，高度に医療・社会の問題でもある。ここに切り込んで行くことは極めて難しく，更に言えばうっかりした事を言えない危険な取り組みかも知れない。しかし，バイオロジカルクリーンルームを作ってきたのも室内環境の分野の功績によるところが大なはずである。これまでの知見がどれだけ生かせるか分からない。今後の成長も分からない。しかし，学生に対して「建築は社会への責任を負っている」と公言してしまっているのも確かである。さてこの建築の持つ「社会への責任」とやらをいかにして果たしていくのか，自らに問うてみるのも怖い反面，面白い話かも知れない。